様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 １５ 日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ０２７３２

研究課題名（和文）抽象名詞辞書構築のための基礎研究

研究課題名（英文）A fundamental study on compiling a Japanese lexicon of abstract nouns

研究代表者
丹羽　哲也（NIWA, Tetsuya）

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：２０２２８２６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：　抽象的な意味を表す名詞は、その文法的な性格についての研究があまり進んでいない。本研究は、名詞に関連が大きい諸構文、すなわち、存在文、いわゆる文末名詞文、いわゆるカキ料理構文、モノダ文、コトダ文といった諸構文について、各構文の下位分類とその相互関係、および、名詞の意味類型と各構文の関係を考察した。人の性質を表す名詞を例に取れば、より抽象的・非限定的な属性を表す「性格、性質、気質、人格、人柄、体質など」と、より具体的・限定的な属性を表す名詞「長所、短所、弱点、個性、癖、特質、特色、特性、才能など」との間において、諸構文における用法の相違があることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　国語辞書は、言葉の語義や用法を記載するものだが、言葉の文法的な性格の記述を取り入れることで、語義や用法の特徴がより明らかになる。近年の国語辞書は、この点で充実してきているが、それは文法的な性格が比較的明確な動詞が中心になっており、名詞については文法的な性格が記載されることがあまりない。具体的な物を表す名詞であれば、それがなくても問題は少ないが、抽象的な意味を表す名詞については、それを欠くと、語義の記述も十分なものにはならない。本研究は、その問題を克服することを目指して、名詞に関わる構文の基礎的な考察をなしたものである。

研究成果の概要（英文）：The study of the grammatical characteristics of Japanese abstract nouns is still underdeveloped. This investigation focused on constructions closely related to nouns, such as existence construction, "noun-final" construction, "kaki-ryouri" construction, "mono-da" construction, and "koto-da" construction. It also examined the sub-classifications of each construction, the relationships between them, and the associations between the semantic class of abstract nouns and their construction. For example, usage-related differences were found in the above types of the construction of nouns expressing human nature with high abstraction and non-restrictive attributes, such as "seikaku(性格)","seishitsu(性質)","kishitsu(気質)","jinkaku(人格)","hitogara(人柄)", and "taishitsu(体質)",and nouns expressing more concrete and restrictive human attributes, such as "chousho(長所)","tansho(短所)","jakuten(弱点)","kosei(個性)","kuse(癖)","tokushitsu(特質)","tokusei(特性)",and "sainou(才能)".

研究分野：日本語文法

キーワード：文法　抽象名詞

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

助詞・助動詞という機能語は措いて、実質語の中では動詞の研究が最も進んでおり、国立国語研究所『動詞の意味・用法の記述的研究』（1972）を始めとして、意味と文法の記述的な研究は枚挙に暇がない。小泉保他編『日本語基本動詞用法辞典』(1989) は、700 余りの基本動詞について、その意味の定義をいくつかに分けて示し、その意味ごとに文型を提示して、格体制を明らかにし、主語や補語にくる名詞の意味タイプを示して、具体的な例文を挙げる。さらに、「文法情報」として、受身・使役・可能・相（アスペクト）・意志・命令・禁止という文法範疇について、各動詞がそれをどのように表すか、それぞれ例文を示している

これに対して、名詞は、名詞述語文や連体修飾構造のような文法構造の研究は多いが、名詞の語彙的意味と名詞の用いられる構文とを関係づけたものはごく乏しい。ほとんど唯一体系だった研究といえるものは、情報処理振興事業協会『計算機用日本語基本名詞辞書ＩＰＡＬ（Basic Nouns)』(1996)である。この辞書は、名詞ごとに、意味情報（意味素性）と文法情報が例文とともに示されている。しかし、意味記述や意味素性の記載と文法情報がどのように関係するのか、これを読んでもよくわからない。ここに名詞研究の困難がある。

また、近年は、影山太郎編『日英対照 名詞の意味と構文』(2011)などにおいて、「クオリア構造」による分析、名詞を「外的分類（形式役割）」〉「内的構成（構成役割）」「目的・機能（目的役割）」「成り立ち（主体役割）」という四つの観点から名詞を分析することが行われている。注目すべき研究だが、具体名詞を扱うことが多く、抽象名詞の分析はまだ乏しい。

名詞の分類については、「普通名詞、固有名詞、代名詞、数詞」という常識的な分類はあるものの、名詞の大部分を占める普通名詞の下位分類として通説的なものはない。仁田義雄『文と事態類型を中心に』(2016)は、固有名詞、代名詞の他に、「人名詞、物名詞、事名詞、時名詞、所名詞、動作性名詞、様名詞」を挙げている。これはもっとも分類であるが、本研究の関心の中心は、この中の「事名詞」の内実にある。この点、西山佑司『日本語の名詞句の意味論と語用論』(2003) の「飽和名詞」と「非飽和名詞」の区別は重要である。しかし、抽象名詞の多くのものは非飽和名詞であり、その中での多様性が問題となる。

２．研究の目的

本研究は、日本語の抽象的な意味を表す種々の名詞の意味と文法的性格とを総合的に記述した抽象名詞辞書の構築に向けて、個々の名詞の記述を蓄積し、かつ、抽象名詞の多面的な分類をめざすものである。上述のように、抽象名詞の意味と構文とを有機的に結びつけて記述したものは極めて乏しい。具体的な物を表す名詞ならば、その意味は日常的･百科辞書的な知識に依ることができ、文法的な性格も比較的単純である。しかし、抽象的な意味を表す名詞は、その意味も文法的性格も複雑で、詳しい辞書が望まれるのだが、一朝一夕にできるものではない。本研究は、その具体的な方法を模索するための研究である。

３．研究の方法

次のような名詞の働きが大きい諸構文について、コーパスで用例を収集しつつ、その意味的・統語的特徴を考察する。（ア）連体修飾節構造、（イ）「の」による連体修飾構造については、一定の見解を得ているので、（ウ）存在文・所在文、（エ）コピュラ文（措定文、指定文、カキ料理構文、文末名詞文）に注力する。そういう中で、どのようなタイプの名詞が、諸構文のなかでどのような働きをするのか、総合していくことをめざす。

４．研究成果

（１）「ＡにはＢがある」という存在文や「ＡはＢだ」というコピュラ文は、「Ａ」の性質を「Ｂがある」「Ｂだ」で表すことがある。性質を表す抽象名詞の中 で、「長所、短所、欠点、欠陥、弱点、難点、汚点、盲点、美点、利点、取り柄、強み、弱み」、あるいは、「特質、特色、特性、特徴、本質、本性」などの名詞は、「彼には長所がある」「この物質には他にない特色がある」といった存在文は用いられるが、「×彼は長所だ」「×この物質は他にない特色だ」というコピュラ文は用いられない。また、「個性、癖、才能、資質、素質」といった名詞にも同様の傾向がある。これに対して、「性格、性質、気質、気性、 キャラ、キャラクター、性分、人格、人柄、体質、体格、品質、性能、たち(質)」などの名詞は、「彼はまじめな性格だ」のようにコピュラ文には用いられる が、「？彼にはまじめな性格がある。」のように存在文で表しにくい。このような存在文とコピュラ文との間で名詞によって生起状況が異なるのは、前者の名詞群の限定的な性質、後者の名詞群の非限定的性質によるものであると考えられる。抽象名詞の中で、少なくとも性質を表す名詞群においては、このような意味的な限定性によるタイプ分けが可能である。

（２）いわゆる「文末名詞文」についての研究を深化させた。「文末名詞文」は、通常、「Ａは（連体修飾部）Ｂだ」の形を持ち、ＡとＢが包摂・一致関係にない文の中で、連体修飾部が必須である文を言う（例「彼女は解放された気分だ」）。しかし、連体修飾部が必須であるか否かということは本質的な問題ではなく、「形容動作性名詞文」という括りの中で、「連体型」（上例）と「単独・連体型」（例「彼女はもう自由だ」があるということを主張した。かつ、名詞述語を形成する関係名詞において、連体型のみ成り立つもの（例「性格、感じ、様子」）と単独・連用型が成り立つもの（例「気分、仕事、天才」）という区分が、広い範囲にわたって成り立つことを示した。 また、「文末名詞文」（「Ａは（連体修飾部）Ｂだ」）は、いわゆる「カキ料理構文」（「Ａは（連体修飾部）がＢだ」）と近似的であることがある（例「彼 は毎日散歩する習慣だ」「彼は毎日散歩するのが習慣だ」。一方で、前者のみが成り立つ名詞（例「彼は朗らかな性格だ」）、後者のみが成立する名詞（例「事故は過重労働が原因だ」）がある。この名詞の性格の違いは、「Ｂは何か」「Ｂはこれだ」という構文が可能か否か、「Ｂがいくつあるか」という構文が可能か否か、などと連動していることを指摘し、そこから、強対象性の名詞と強性状性の名詞という区分が可能であると主張した。

（３）いわゆるカキ料理構文（例：「カキ料理は広島が本場だ」）の使用条件の考察を進めた。先行研究において、カキ料理構文「ＸはＹがＺだ」は、Ｚが非飽和名詞でなければならないということが必要条件として提示されているが、非飽和名詞であっても、カキ料理構文が成り立たない場合が多く、さらに条件を絞る必要がある。そこで、本研究は、文末名詞文と比較検討した。例えば、「性格」という名詞は、「山田は穏やかな性格だ」という文末名詞文は成り立つが、「*山田は穏やかなところが性格だ」というカキ料理構文は成り立たない。それに対して、「長所」という名詞は、「*山田は穏やかな長所だ」という文末名詞文は成り立たないが、「山田は穏やかなところが長所だ」というカキ料理構文は成り立つ。このような観察に基づいて、「カキ料理構文「ＸはＹが(Ｒ-)Ｚ」は、その成立条件として、「ＹがＺ」「ＹがＲ-Ｚ」の指定関係と並行する潜在的な事態が想定されやすくなければならない」という制約を導いた。抽象名詞の多くは、文末名詞文が成り立ちやすいタイプとカキ料理構文が成り立ちやすいタイプに分けられる。人や物の性質を表す名詞群において、「欠点、 難点、強み、持ち味」あるいは「特徴、特質、本質、天性」といった名詞は「長所」と同様の振る舞いをし、「気性、資質、性分、人格、人柄、品質、性能」と いった名詞は「性格」と同様の振る舞いをする。また、思考･感情を表す名詞群においても、「気分、気持ち、感情、心境、思い、考え、意見、判断、見解、認 識、覚悟、心構え」といった名詞は前者、「思い出、快感、喜び、悩み、恐怖、疑問、驚き、驚異、願い、あこがれ、嫌い、好み、好判断、本音」といった名詞は後者に属する。その他、「定説、通説」と「説」、「社長」と「地位」、「10 年目、土曜日」と「年、日」など、このような対立が幅広く成り立つことを示した。

（４）モノダ文、コトダ文は、助動詞化した用法についての先行研究は多いが、名詞述語文としての分析は乏しい。そこで、名詞述語としてのモノダ・コトダ・トイウモノダ・トイウコトダが、それぞれどのように用いられ、どのように異なるかという問題を考察をし、次のような結論を得た。 (ア)コトダ文は、「指定文」として用いられることが多く（例「彼女の長所は視野が広いことだ」）、非選択的な文脈では用いられにくい。(イ)モノダ文は、「措定文」として用いられることが多い（例「この風景はどこかで見たものだ」）が、 「内容文」としても用いられ得る。後者は主名詞モノと修飾部が内容補充関係を形成する点で特殊であるが、少なくとも、主語名詞の内容を客観的な事実として解説するという性格を持つ。(ウ)トイウモノダ文は、やはり主名詞モノと修飾部が「内の関係」を形成するが、「トイウ」の働きにより、「内容文」として広い範囲で用いられる（例「交渉の結果は戦争を回避できるというものだった」）。モノダ文・トイウモノダ文はともに、コトダ文と異なり、選択的な文脈では用いられにくい。(エ)トイウコトダ文は、主語が名詞節である場合に用いられることが多い（例「大切なのは運命は変えられるということだ」）。一方、主語が名詞句の場合には、トイウモノダ文と重なるところもあるものの、選択的な文脈で用いられ得る。(オ)コトダ文・トイウコトダ文は、「換言文」としても用いられ得る（例「教育とは子どもの能力を引き出すことだ」）。

（５）研究期間全体を通して、存在文、コピュラ文、文末名詞文、カキ料理構文、モノダ文、コトダ文といった、名詞を中心とする諸構文を広く考察することができ、抽象名詞の文法的性格の諸相を、限られた範囲ではあるものの、明らかにすることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 丹羽哲也	４．巻 61
２．論文標題 名詞述語文としてのモノダ文とコトダ文	５．発行年 2021年
３．雑誌名 文学史研究	６．最初と最後の頁 26-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24544/ocu.20210330-002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 丹羽哲也	４．巻 60
２．論文標題 カキ料理構文の成立条件について―文末名詞文との比較―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 文学史研究	６．最初と最後の頁 56-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24544/ocu.20200525-001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 丹羽哲也	４．巻
２．論文標題 性質・状態・動作を表す名詞述語文の「連体型」と「単独・連用型」―「文末名詞文」の解消―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 形式語研究の現在	６．最初と最後の頁 255-278
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 丹羽哲也	４．巻 70
２．論文標題 逆接の接続助詞「が」「にもかかわらず」と対比を表す助詞「は」「こそ」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 人文研究　大阪市立大学大学院文学研究科紀要	６．最初と最後の頁 133-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24544/ocu.20190404-008	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 丹羽哲也	4．巻 58
2．論文標題 性質を表す存在文とコピュラ文との対応―「長所」「特質」「性格」などの場合―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 文学史研究	6．最初と最後の頁 38-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24544/ocu.20180515-001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 丹羽哲也	4．巻 57
2．論文標題 「文末名詞文」における題述関係と形式化	5．発行年 2017年
3．雑誌名 文学史研究	6．最初と最後の頁 83-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24544/ocu.20171225-001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 丹羽哲也	4．巻 －
2．論文標題 「文末名詞文」の位置づけと所属語彙	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本語の多様な表現性を支える複合辞などの「形式語」に関する総合研究	6．最初と最後の頁 143-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 丹羽哲也
2．発表標題 カキ料理構文と文末名詞文
3．学会等名 形式語研究会
4．発表年 2019年

１．発表者名 丹羽哲也
２．発表標題 「文末名詞文」と存在文との関係――性格を表す諸名詞の場合―
３．学会等名 形式語研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 丹羽哲也
２．発表標題 性質・状況を表す名詞文について―「文末名詞文」の位置づけ―
３．学会等名 形式語研究会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関